

11月21日

全体討論

パネラー：鈴木 靖民
濱田 耕策
酒寄 雅志
森 公章
司 会：荒木 敏夫
飯尾 秀幸

荒木：それでは、討議を始めさせていただきたいと思いますが、明日の報告者で私ども専修大学と提携校の關係にあります西北大学の李浩先生、そして王維坤先生が本日も会場にお見えになっておられますのでご紹介いたします。

飯尾：それでは、1時間ほどですが討論に入ります。たくさんの質問用紙をいただきましてありがとうございます。ただこれを短い時間でまとめるのは私の能力を超えています。多くの場合は省略させていただくこととなりますが、ご了承ください。私達の5年にわたるプロジェクトの今年はちょうど3年目です。その後2年間どうなるか分かりませんが、留学生を視点として東アジアを捉えていくという私たちの研究、そのきっかけを作ったのは井真成でした。その問題と、これまで2回シンポジウムをやってきて、その中で課題がはっきりしてきたのは、鈴木先生がまとめてくれましたけれども、東アジア世界をどう捉えるかということでした。それに沿って討論していきたいと思います。

一つですね、井真成について若干質問がありました。それと渤海關係、新羅關係で質問があります。先にそれぞれ先生方にこれらの質問にお答えいただき、その後に東アジアというものについて、改めて私の方でまとめさせていただきますので、それについて討論していきたいと思います。まず、質疑ということをお願いいたします。鈴木先生お願いします。井真成のことについてです。今回『年報』3号が間に合いませんでしたので、皆さんにはまだ周知ではありませんけれども、7月に行ないました研究会で中国の韓昇先生が井真成について、あれは留学生ではないということを力説された訳ですが、それを今回紹介されました。それについて鈴木先生の見解を伺いたいという質問が入っていますので、それについてお願いします。

鈴木：私の今日の資料の論文の形で3ページの下の方から4ページの上の方にかけて簡単に書きましたけれども、2005年から色々な井真成についての研究が始まりました。私に限らず日本の研究者は、井真成は墓誌によると734年に亡くなっていますので、その前の717年の遣唐使の時の若

者で、したがって留学生として遣唐使の一員として唐に行き、学問をしていたのではないか。そして、734年に急に亡くなったというのが通説だったので。しかし2005年に中国でも、西安と北京で唐代史の研究者によって共同研究が始まりまして、北京大学の榮新江先生、今司会の飯尾先生のおっしゃった、この夏に専修大学で報告された上海復旦大学の韓昇先生、それから日本でも報告されたのですけれども、中国社会科学院歴史研究所の馬一虹先生などが733年天平の遣唐使で唐に渡った人という見解が示された。そうなりますと井真成が亡くなった時に皇帝の近くで衣服の仕事をしていたかのような位を贈位される。それが717年に唐に行った、日本ではそう考えていたのですが、そうではなく733年であれば、日本の位でいうと少なくとも五位クラスの可能性があることになるのですね。五位クラスというと、今風に言うと高級官僚なんです、古代では。つまり五位以上が簡単に言えば高官で、六位以下は中級官僚なんです。お役人の位を持たない人もいっぱいいる訳で、そういったしますと、日本の〇〇省〇〇寮の〇〇司、この役所の長官、つまり守クラスの位なんです。そういう人が果たして遣唐使の一員になるんですかね。もしなるんだったら、もう少し他の歴史上の例から言って、名前を現しても良いのではないだろうか。それから韓昇先生の報告は、私も聞いており、帰国される1日、2日前に私にメールで論文を送っていただきました。それを拝見してみても、遣唐使の判官クラスである。大宝の遣唐使の前は、主な判官クラスまで名前を載せているということで、私は良いかと思えますけれども、ただ他にまったく名前を現さない者もいるということが、まだその説に乗りきれない点です。また日本の井真成についての学説を作った一人として、ここで転向して良いものかどうか。更に検討を加えたいと考えております。

飯尾：これはまた2年後に私達がある程度の結論を出すことが出来るかどうかという問題でもありますが、今の段階では・・・。

鈴木：もう一言追加しますと、今日早稲田大学の石見先生が来られていて、石見先生は墓誌が発見された時から日本史の我々に非常に挑発的で、こんなもの中国に行ったらいくらでもあると言われた訳で、その通りだと思います。墓誌はあまりにも簡単ですし、数行空白のままなんですよね。つまり、既製品を、どこかで吊しの洋服を買ってきたようなものでダボダボで、ちょん切ったり、短くても良いか、とこういった例えがあてはまるような墓誌なんです。そういった点もまた韓昇先生や石見先生の言われていることが妥当なのかどうかということがあります。

飯尾：それでは、石見先生今の点について何か一言、お願いできますか。

石見清裕：私もどちらかという韓昇さんのように20年近く留学していて、亡くなった人に贈官されるかどうかという問題があります。さらにその当時の使節の一員として来て、そして亡くなったのであれば贈官して国費でお葬式を出すというケースがありますので、むしろそちらの方が良いかなと思います。そういった人に対してああいう具体的なことがほとんど分からないで墓誌を造るかということですから、例えば北方民族のトルコ民族の部族長の息子クラスが

唐に行って、突厥という国が減んで体調を崩したのか、滅亡の混乱で怪我を負ったのかは分かりませんが、行くときに亡くなって、国費で埋葬されたのですが、その墓誌が井真成の墓誌と非常に似ています。したがって仮に判官クラスの人が行って、長安に着いた途端に亡くなって、急遽唐側がお葬式を出したという場合もあるという形の墓誌が造られるという可能性はあるのではないかと思います。養老か天平かというのはなかなか私にはどちらが良いとまでは言えませんが、今のところ、三十数歳ぐらいで行って、着いてすぐ亡くなったという方が理にかなっているのではないかなという気はしています。以上です。

飯尾：ありがとうございました。池田先生いかがでしょうか。今の点についてご意見をいただきたいのですが。

池田温：今石見先生が言われましたように、韓昇先生は唐代の官制等々についても非常に明るい方ですし、日本に来た朝鮮半島あるいは中国から移住した人についての大きな研究もしておられるので、そういった点でその説は、中国の歴史の専門家の見解として傾聴に値する、と感じております。留学生であったという決め手は墓誌の文からは読み取れないのではないかと思います。簡単ですけども。

飯尾：ありがとうございました。こちら側にも語るべき人がいない訳ではありません。矢野先生、いかがでしょうか。

矢野建一：韓昇先生の意見、私もお聞き致しました。韓昇先生の指摘の特徴は判官クラスとははっきりと性格付けているところにあるかと思えます。史料の根拠にはならないのですが、承和の最後の遣唐使のところで唐に渡って、あるいはその途中で亡くなった方のリストがあるのですが、これを見てみますと、阿倍仲麻呂とか色々居りますけれども、少なくとも判官以上の者であるというのがこのリストの性格でありまして、その中に井真成の名前がないことが一つの根拠になるかと思ひまして、養老で入って、17年在唐して、志半ばで亡くなった留学生であると今でも考えております。

飯尾：どうもありがとうございました。あと数年で解決する問題ではないのかもしれませんが、この研究プロジェクトは、あと2年しかありません。更に私たちも考えていきたいと思っております。質問の一つの柱が井真成でしたが、これはここで終了させていただきます。

次に東アジア問題について、例えば唐と新羅と日本と渤海との関係について、少し討論していただきたいと思ひます。その前に、ごく短くお願いしたいのですが、いくつかそれぞれ質問がございます。すべて取り上げることはできませんので、主だったものだけ取り上げたいと思ひます。

渤海に関わる部分について酒寄先生にお願いします。唐への道が二つあったということですが、役割や機能によって使い分けがされていたのかどうかということをお願いします。

酒寄：一つは長安へ行く道、所謂「朝貢道」と、もう一つは「営州道」です。機能ですが、例えば司賓卿の賀守謙というのが幽州に行った。この幽州に行った時のことは張建章墓誌の分析をきちっとしなければなりません。その時期は820年代だと思えますけれども、そういう状況を踏まえて、その時、幽州へ何故行かなければならないのか、そして幽州節度使との関係がどうであるのか、といった点を分析してみないとなんとも言えないのです。今回は現象面だけで捉えたので、これ以上お答えできる案は持っていません。

飯尾：どうもありがとうございました。次に参りたいと思います。

新羅について、実はかなりの質問をいただいております。その中で東アジアに関するものは後に回させていただきまして、二つほどお願いいたします。新羅人が長期間、唐に滞在する訳ですが、その理由と科挙に及第した新羅人は何人程いるのか、ということについてお願いします。

濱田：まず科挙、賓貢科とか文書科とか如法科とか科挙試験には色々ある訳ですが、賓貢科というのを最もよく研究している申滢植先生は、新羅人の合格者について研究しています。また、台湾大学を定年退職されている高明士さん、私の参考文献の8番に挙がっていますが、この方がよく研究をされていまして、9世紀あたりから唐では留学生のための科挙試験が賓貢科ということで登場いたします。これによく新羅人が合格しまして、その合格リストの合計数が、不正確ではありますが、トータルとして50人ほどいるようです。後日、本日の報告を文章化する中で出典と数字を明らかにしたいと思いますが、そのように合格しております。私が近年研究しております、崔致遠という方も賓貢科で合格しております。

それから、長期滞在するのは何故か、という問題です。あまり滞在しすぎてもよろしくないといいますが、我々近代のアメリカ留学生もそうですね。長く留学しているとそちらの方の文化になじんで、国に帰ると違和感を感じるのでしょうかね。崔致遠も長く滞在してのち国に帰って、不遇な生活の中で海印寺の中に籠もってしまうというようなお話もあります。さて、長く滞在するのは何故かという、これは、それをうかがわせる記録は特にありませんが、やはり暮らしやすかったのでしょうかね。言葉は自由に通じるようになりますし、それから故国からやって来る方の世話があるでしょうし、それから、チャイナタウンがありますように、新羅タウンといえますか、山東半島一帯、或いは揚州から北に新羅タウンが出来ていますので、そういった面では非常に過ごしやすかったということがあるかと思えます。

飯尾：ありがとうございます。同じ長期滞在ということで、鈴木先生にお尋ねしたいのですが、円仁が長期滞在したということですが、その理由と、費用などはどこから捻出されたのかということをお願いします。

鈴木：『(入唐求法) 巡礼行記』で分かるのは、円仁は、先程申し上げたことと重なるかもしれませんが、はじめは請益僧、つまり短期で比叡山などで分からなかったこと、森先生から先程お話がありましたが、「難義」というものの回答を求めて、唐の優れたお坊さんのいる寺とか、或

いは経典類、テキストを手に入れるとか、そういったことを目的とする遣唐使です。遣唐使は都に行って、帰ってきます。遣唐使が帰る時に一緒に帰る。ですから、早ければ1年とか、遅くとも2年程度で帰国すべきところです。しかし彼にはもう一つ目的がありました。特に今の浙江省の天台山へ行きたい。何故かという、最澄たちが行っているからです。それで行きたかったの、ずっとそれを追求する訳です。そのため結局は密入国します。遣唐使が帰ってしまうのに、山東半島で。彼は密入国をして、それでも天台山を諦めなかったのですね。多分、日本には天台山しか情報が無かったのだらうと思います。仏教のメッカは。メッカと言うのもおかしいですけども。それで、世話になっている、新羅村で新羅僧等の情報で、もっと山東半島の近いところに五台山があるということを知るのです。その程度の知識なのです、日本の仏教界は。或いは貴族たちは。それで、そちらへ行って、最終的には長安へ行くという、要するに仏教の求法が彼の最大の目的です。

それからお金は、先程少し触れたのですけれども、砂金です。砂金は持って行っています。持って行って、どうやって運ぶのか、リヤカーか何かで運ぶのかもかもしれませんが、他の人ですが、揚州で買い物した時もリヤカーみたいなもので買い物をして、買ってはいけない物を買って、追いかけて、買った物を捨てて逃げたという記事が日記に書かれていますけれども、そういうことです。それからお金が無くなった人の場合、円仁ではないのですけれども、時々唐に送金するようなシステムがありました。それから、唐に駐在しているお坊さん、在唐僧がいました。というように、史料だけではほんの断片しか知られない、そういう存在もありますし、話が少し逸れますけれども、遣唐使をやめた方が良いと言った中瓊というお坊さんも唐に駐在していて、その人の情報で派遣をやめました。道真の遣唐使の停止というものはそういうことです。

飯尾：ありがとうございました。ここで森先生になるかと思いますが、日本国という国号ですね、これもこの研究会やその他で話題になりましたけれども、国号変更を唐に伝えるという、その意味というのはどの辺にあるのか、それから日本に百済の人たちがやって来て、渡来人として活躍するわけですけれども、そういう人たちの情報というものと、遣唐使がもたらしてくる情報というものの関係性というか、役割というか、そういうものについて教えてください。

森：国号変更を伝える意味というのは、日本国号を、とにかく、669年、670年の遣唐使までは倭国と言って、それから約30年間、大宝の遣唐使の間に日本という名前になった。日本という名前になったという初見は『三国史記』に697年ぐらいの記事があって、韓国ではそちらの方が初見ではないかという説がありますが、とにかく唐と通交するのは701年に任命されて、702年、703年に長安に行く訳ですけれども、その時にどこから来たかですとか、色々な質問がある訳で、そうなる倭国と言っていたのに、何故日本なのかということは当然質問されるはずで、名前を変えている訳ですから。それで日本国と言わなければしょうがない。そこには多分、井真成墓誌が出てから私も大分、遣唐使関係史資料を見たところ、正史には書かれておりません。色々なやりとりがあったうえで、倭国から日本へという国号変更が認められたのではないかと思います。その辺りは『旧唐書』日本伝にも日本という国名の由来が三つぐらい説がありまして、日本人

はあまり詳しく説明しないので、よく分からない、疑問のままであるということは言われています。そういうことですから、とにかく国号変更は、日本という名前になっている訳ですから、それを伝えて、説明する必要があったということです。当時、唐の方も実は大周と言って、則天武后の時期には唐ではなかったのです。ですから、その辺りのことはお互い様だということもあって、日本国号の変更は認められたのではないかと。日本側は時々しか行かない珍客ですから、新羅と渤海とに対する厳密な対応と、日本の遣唐使に対する対応、先程の午前中の鈴木先生の報告ですと、辺縁国という一つ遠いところにいたのです。また、日本は絶域ということもありますけれども、そういう日本のアジアの中における位置づけ、そういったものを考える必要性があると考えます。

それから情報に関して。おそらく30年間遣唐使がなかった時期に関しては、新羅使から情報を得たと考えられます。新羅使はほとんど毎年のように日本に来ていました。ただ、新羅使が伝える唐の情報というのは、おそらく大宝の遣唐使が行ってみると、少し違うところがあったのではないかと思います。そのころ新羅は必ずしも唐との間に緊密な関係をもっていない。実は大宝の遣唐使が行く少し前は、むしろ新羅には4～5年ぐらい唐とは関係が無い時期がありました。日本が大宝の遣唐使を派遣して、則天武后の唐と関係を結んだ、逆に新羅がその後連続して遣唐使を派遣するという事は、そういった東アジアの中での国際関係を築くという、そういう関係があるのではないかと思います。情報の質といったものはよく分かりませんが、ただ7世紀末に来ていた新羅使は全て正確な情報を日本に伝えていた訳ではないのではないかと思います。やはり、その辺りに国際交流とか、東アジアの中での国際関係に関わる緊張した関係というものも、今後探っていく必要があるのではないかと思います。以上です。

飯尾：ありがとうございました。時間も押してきましたので、もう一つ、質問が多かったものは、東アジアにおける日本と唐との関係で、そこに果たした新羅の役割は、という質問です。それはこのようにまとめさせていただきます。

東アジア世界像というものを新たに構築したいというか、その有効性を議論したいというのが私たちのプロジェクトの一つの大きな柱です。今までこれについて、いくつか考えるべき論点を出してきました。今回、鈴木先生が、中国を中核国家、朝鮮半島を周辺国家、それから日本を周縁国家と三つに分けるというアイデアをご提言くださいました。けれども、私たちがこの二年間で考えたことは、中国を中心として、同心円と放射線状に伸びていく唐と新羅の関係、或いは唐と日本との関係というよりは、同心円の円周上にある日本と新羅の関係みたいなものが、東アジア世界論にひょっとしたら有効性を持たせてくれるのではないのかということでした。鈴木先生のこの提言は、それとは少し違った東アジア世界像で、その方がもっと普遍的世界観になる可能性はあります。その文脈の中で、質問の、例えば日本の遣唐使が行く時には、新羅人の通訳を付けるとか、或いは様々なサゼッションをもらっていた。そうした役割といったものについて、どのように評価するか、というようにこれらの質問を受け取って参りたいと存じます。

この二つの東アジア像の中で、新羅をどのように位置づけるかということについて、報告者の皆様に1人ずつお考えをお聞きしたいと思います。鈴木先生には最後に語っていただくことにし

まして、いかがでしょうか。濱田先生お願いできますでしょうか。

濱田：日本の遣唐使船の通訳に新羅人がいたというようなことは、円仁のあたりの9世紀の半ば以降でありましょうし、それ以前はどうかということになるのですが、具体的な事例が思い浮かびません。森先生のお話で、唐の長安で遣唐使同士が、或いは留学生同士が交流するというような事例を、私は非常に注目して、もっと色々と発掘したら良からうかなと思うのでありますが、東アジア世界史像を新たに構築するという時に、政治という次元での東アジア史像というのと、文化史の面でのいうのとではズレがあるだろうと私は考えております。文化の面、或いは文化意識の面で言いますと、新羅は、或いは新羅・日本・渤海は微妙に違ってきていると思います。それは、先程新羅が中華の周辺ではなく、中華の一角を担っていると申しましたが、中華の中に入り込む方法で動いている、これが9世紀の末、崔致遠の辺りでかなり強力に現れていると見ております。それから、政治面では遣唐使が座席争いをする、或いは科学の試験の合格発表の序列を争う、或いは朝賀の儀式の席次争いですとか、政治面では唐からいかに高い評価を受けているかというライバル意識が日本・新羅・渤海との間には現れているという、そういった局面がしばしば現れる。したがって東アジア世界史像を構築する時にはいくつかのデッサンが可能であると考えます。

飯尾：酒寄先生お願いします。

酒寄：何を話して良いのかなと思いつつ、色々お話をいただいたので、少し考えてみました。まず私がやっていることなので、渤海のことからお話します。渤海と新羅のことを考えますと、8世紀の初頭の大祚榮が国を作る時には、もしかすると渤海は新羅に救援を求めている可能性がある。というのは、先程から濱田先生のおっしゃられている崔致遠の史料の中に出てきています。大阿飡の位を大祚榮に与えたと。渤海が新羅に救援を求めたのは、国家形成のための支援が必要だったからだ。そういった関係もあるのですが、それ以降は新羅と渤海の関係はほとんど断絶状態です。9世紀の初頭に2回新羅の使者が渤海に来たという例があるだけです。

もう一つは先程二つほど例が出ましたが、争長事件で座席争いをするとか、賓礼行事の上下を争うとか、常に渤海を新羅の上に置いてくれだとか、新羅を意識しています。それは、国際社会の中では新羅の方が圧倒的に高い地位にあり、それは日本と新羅を比べても新羅の方が国際社会という場では上位にあったのだらうと。だからこそ、大伴古麻呂の席次争いでひっくり返すという、ひっくり返さざるを得ないという、自分たちの国際認識と唐における国際社会における評価は別であったと、そういったことの現れではないかと思っております。ランク的に言えば基本的に新羅が上位であって、渤海や日本はその下位に位置づけられる、そのようなイメージで考えてみたらどうかなと思っております。

飯尾：森先生お願いします。

森：通訳として新羅人が活躍するという事は、先程もお話ししましたように、承和の遣唐使という、事実上最後の遣唐使の段階に顕著にうかがえます。そこには9世紀或いは8世紀後半ぐらいから国際社会の中における、新羅人の役割が、非常に大きくなってきますので、そういった中でおそらく新羅人の通訳を雇ったものと考えられます。

話の中で最後触れることが出来なかったのですが、日本には独自に中国語を話せる人がおります。ただそれは、中国語の発音には漢音と呉音の二つの発音がある中の呉音の方が中心になります。漢音が長安等の北方の系統で、呉音というのは例えば御行の御は呉音で、行は漢音です。日本の漢字の語は二つ三つあることが多いですが、呉音の方が所謂5世紀の上海から南の方の発音です。ただ、この音は長安の標準発音とは違いますから、所謂訛りであるということで、奈良時代にはしきりに直そうとします。しかし、遣唐使の大半が上海以南の所に居ましたから、結局身につくのは呉音の発音で、直りませんでした。有名な9世紀初頭の桓武天皇や嵯峨天皇の時に非常に唐風化と言いますか、中国化が進んで、例えば門の名前も平安京の門は応天門と言いますが、奈良時代には大伴門と変えていっています。そういう中で、確かに漢音ということをやろうとするのですが、結局定着せず、現在でも呉音なんです。そういった流れがあります。そうなりますと、語学というものは非常に苦手になりますし、先程鈴木先生がおっしゃっていた、最澄はとにかく語学が出来ないので、通訳を付けて行くんですね。ということもあって、中国語のネイティブ的な発音のできる人材というのは日本にいないので、その時期に活躍する新羅人に頼っていきます。

逆に言うと、無理に遣唐使を莫大な国費をかけて、何十年も留学させるとか、途中で帰ってきても大概漂流して非常に苦勞する。そういったことをしなくても、日常的な新羅の船・中国の船を使えば中国に行くことが出来るし、そのあたりは現在のパスポートでの入国審査との違いがあるのかもしれませんが、僧侶であって、遣唐使だと円仁は天台山に行けなくて密入国する訳ですが、それ以降の人、円珍ですとかは商船に乗って行って、自分のやりたいように求法するということになります。そういった中で特に奈良時代、8世紀は日本の律令国家ないしは新羅、そういったものがかなりしっかりしていて、全面的に出ている、あまりそこでは国際的な役割というのは無いのかもしれませんが、そういったものが無くなってくる8世紀後半から9世紀ぐらいになると、国際的に活躍する新羅人の役割、或いは新羅の役割というものが東アジアの中では非常に大きくなっていきます。その後、唐の商人ですとか、唐や宋の商人が直接行って、次の時代へ進んでいくという中で、新羅の役割は変わってきます。直截な答えになっていないかもしれませんが。

飯尾：ありがとうございました。ここで、フロアの皆さんから、東アジア世界という難しい問題ですが、何か発言して下さる方いらっしゃいませんか。

フロア（下山）：下山と申します。東アジアの全体を考えるスキルとして、今までの冊封制度というものがうまくいかない、一面では冊封制度は合っているけれども、それでは全てを推し量る事が出来ないということ、最近若い先生方の論文を読んでいますと感じます。どうしても古い世代は、律令体制は中央集権国家で、何でも一つの国家が取り仕切るといった、中央集権的な歴

史観といったものに影響を受けているような気がします。

日本は律令体制で完璧な国家を作った。その後の明治国家も似たような国家です。最近の若い先生達は、交易というものが大切だと考えているようです。もちろん、上下関係等ありますが、交易の民ということで考えると、お互いに相手がいなければ交易は出来ませんので、上下関係はない。中国や韓国の人は何でも上下関係で考えて、中国が上か、韓国が上か、そのようにものを見るのではなく、横のレベルでものを見るということが大切なのではないかと思います。交易国家でみれば、全てうまく見えるのではないかという気がいたします。

飯尾：どうもありがとうございました。田中史生さん、ご意見いかがでしょうか。

田中史生：鈴木先生が総括的なお話をされましたけれども、東アジアの中で公権力の問題というものは外せないというお話をされているのだと思います。

一つは交流などの中で、人間関係の一見フラットに見えるような関係がどこかにあり、それが一見権力に関係ないように見えるような部分もあったりするのですけれども、実態としては権力と関わっている部分が多くあって、公権力を外せないのです。私の考えでは、問題となるのは、公権力の関係と東アジアという重要なものが色んな場面において、特に交流史の場面においては、一元的な国家体制の中に包摂される形で出てくるとは限らないということが問題なのではないかと思っています。

簡単に言うと、職権乱用のようなことが起こっていたりするのですけれども、その交流や交易の場面では、無権力状態で動くということは難しく、ある程度秩序は必要なのです。その秩序を発動する人が、必ずしも国家の意思を完全に体现している訳ではない。しかしそういった人がいないと交流ができないということがありますので、権力に依存する形で交流が出来るのと同時に、国家の意思から外れるような形で交流が出来上がっていったりするというような関係があります。そのあたりを所謂東アジア史というのはかつては十分に組み込めていなかったんです。ですから、公権力がないという訳でもないで、これは荒木先生にむしろお聞きしたいものであって、所謂多元化して出てくる権力の問題ですが、一元的なものではなく多元化して出てくる権力の問題が実際にある訳で、交流史等がそういったものを特に抽出してきている訳ですから、そういったものを含めた形で、例えば荒木先生がやられている王権論といったものがどのように今後説明していくのだらうと、これは一国的な形で収斂されるのではない形で、所謂東アジア史の中での権力の有り様なのですけれども、そういったものを見ていくことによって、今の分裂したように見えるものが、どこかで重ねられるのではないかと思っています。

鈴木：私が今日遣唐使の研究を私なりにまとめたのは、昔流の単なる外交関係ではないことは当然確認した上で、文化もそうなのですが、言葉で強調したのは、支配者たち、貴族や皇族たちやそれに連なる宗教者たちの社会ですとか、生活とか、史料の限界もありますが、そういった面のまとめ方を意識的にしてみました。そうすることによって、歴史の多様性というか、豊かな部分をすくえるからだと考えているからです。

そのことをまず表明した上で、今日私は人の研究をまとめる形で、私自身は森先生が参考文献で引用してくださった山川出版社の論文で、新羅の文化がどう入ってきているかということと、やはり同じ山川出版社のシリーズで天津透先生が編集なさった本では、律令のことを書いて考えをまとめました。新しいことではなく、私が20年以上前から考えてきたことで、最近のものでもう一度練り直したのですけれども、それで述べたことを踏まえて、先程のこととごっちゃになりますけれども、遣唐使の派遣に新羅或いは新羅人の広い意味での協力があるかというのは既に言われているように、船の問題であるとか、案内とか、それから通訳などであったのだと思います。それから、数少ないですけれども、遣唐使が新羅道を経由したという例がありますから、渤海も経由していますけれど、そういった意味で新羅の援助というものがあっての唐との関係・交流があったという事実関係は確認できると思います。それから、遣唐使ではありませんけれども、8世紀奈良時代では、『続日本紀』で言うと、外交というか使節の交流が新羅との間では非常に頻繁です。それから、そもそも日本の天平文化・奈良文化の中核を為す仏教文化は新羅仏教を導入することによって、盛んになる大仏の礼拝がそうですね、それに同じような使節が交易活動を行なうということで、広げて言えば唐との関係が非常に深いということになる。その一時代前が百済滅亡の7世紀中葉に、百済の高級官僚・知識人たちが倭国王権に入ってきて、古代日本の国作りに大きい貢献をするのだと思われます。これが所謂律令制国家ですとか、律令国家と言われるものです。

しかし本当の古代国家・日本国が目指すところ、憧れやモデルというものは唐なのだと思います。今日も明らかになったように、現実には唐には新羅・百済と比べれば比較にならないほど、少ない回数しか派遣できない。森先生はそのことは回数ではなく、内容によって細かくお話なされて、興味深いこともたくさん改めて感じました。しかし、そういった外来のものを、在来の日本列島にあったものと合わせて、政治的にも文化的にも、そしてある意味経済的にも、混合、ごちゃ混ぜなんですけれども、一本通すのは中国のものを目標とするというようなものであることは変わらないのだろうと、それが遣唐使を長い間持続・継続させた原動力であったと、私は思っています。ですから、律令国家・日本国としてはそうあり続けていかなければならない、という意味では当たり前かもしれませんが、遣唐使の盛衰というものは、古代の日本国の盛衰と対応関係にあるのだろう。証明するのは難しい論です、大局論ですけれども。

それから、私のいう第一期で、7世紀段階に色々な文化を複合してということを行いましたけれども、これは第二期の8世紀にもつながっていると考えます。森先生と違うのは、私は9世紀の2回を、史料のあり方にもよるのですが、かなり重いのではないかなと思うのです。分けた方が良いのではないのでしょうか。今後はさらに考えを深めていきたいと思っております。

これを、東アジアモデルと私は言いますけれども、これを考える時には（B.）カーンリフ、穴沢味光ですとか背後に（I.）ウォーラステインの世界史というものがあるのではないかと思います。言い忘れていましたけれども、近世から近代にかけては、浜下武志先生が、朝貢システム論と言っていて、今回の議論よりはやや狭いものだと思いますが、こういった問題意識を持った、交易中心なのですけれども、共有できる先生もいらっしゃいます。

そうしますと、やはり中国が中核で、朝鮮諸国が周辺で、日本は周縁というか辺境というか辺

縁というか、このように考えた方が色々な事が理解しやすい。やはり朝鮮諸国と古代日本とは差がつかざるを得ない、それがそれぞれの遣唐使ということに事実としては表に現れているのだろうということになるので、その場合田中さんの指摘されたように、国家・公権力というものが基本的に無縁ではないだろうということになる。ですから、国境を越えるということをも重視したり、交易とか交流論で近年ずっとやっておりますけれども、ある面は当たっていると思いますが、それだけでは解明できない。それから日本列島だけではだめで、やはり朝鮮半島や北の渤海を考慮しておくべきでしょう。また、何故東南アジアが入らないのだろうか、色々な問題がすでに言われており、こうした問題をもう少し追究していかなくてはならない。という意味では最後になりますが、先程の濱田先生の指摘は、新羅・新羅人がそう思っているということなのでしようが、中華の一画だということとは少し違って来る、つまり東と西という説明だけでは、東アジア史としては説明できないという課題が残るのではないのでしょうか。

濱田：あえて議論はにぎやかにした方が良いのですが、中国が中心で、朝鮮半島や渤海が周辺で、日本が周縁という、これは中国中心史観です。これは冊封体制が聖人の皇帝と諸国王との関係で、中国中心の関係ですが、確かに中国は吸引力があるにしても、新羅・渤海が遣唐使を派遣するのは新羅の王権・渤海の王権でありますから、新羅・渤海・日本中心の視点もそこに加味してみるということを試みても良いのではないかと思います。政治の関係、或いは文化の関係、経済の関係、またそれぞれの世界論、地理的に言えば東アジアの世界論が形成できるのではないかと思います。

飯尾：やっとこれからおもしろくなりそうですが、残念ながら時間がきてしまいました。

東アジア世界の有効性に関して、第1回のシンポジウムで最初に疑問を投げかけてくれた石見先生に一言いただきたいと思ったのですが、時間がなくなってしまいました。今後の私たちの課題とか、明日、あるいは来年以降にこれら諸問題をどうつなげるかということ、今回の趣旨説明者でもあります荒木敏夫代表をお願いします。

荒木：4人の先生方からご指摘をいただいた点、それは当然このテーマを掲げていく上で、今後も抱え続けていかなくてはならない大きな論点であり、具体的な論点を出して下さったと思っております。

その中には多分に見解の違う部分があり、その違いはもう少し論証の中で私たちなりの観点も出していく必要もある事を非常に感じました。たくさん会場からも出していただきました疑問・ご指摘等は全てに渡ってお答えする事はとても出来ません。

会場からの全ての質問を、私ざっと読ませていただきまして、ご本人は幼稚な質問とお書きになっておりますが、新鮮なご指摘であると私は受け止めましたことを一点だけご紹介します。お答えではございませんが、こういった点も具体的な部分で、なお議論しておく必要が、おそらく東アジアという大きな問題に関わってくるかと思うのです、

それは、鈴木先生、また濱田先生もそうですし、酒寄先生もふれている遣唐使問題の中の女性

の問題です。それを、遣唐使問題としてどのように考えるのか。酒寄先生との関連から言いますと、日本の舞が渤海経由で、中国に行っています。濱田先生のご報告の中でも女性が中国に行く使節の中に絡んでいる。彼女らが果たした役割というものが使節団の中でどういった意味を持つのだろうか。それはおそらく通訳についてどうなのでしょうかというご質問と同じような趣旨として、私はこれはかなり大きな問題になると思います。遣唐使節団の団長に女性になったという例を我々は知りません。使節の随行団の中ではなかなか女性が目立たないのが現実でしょう。こういった点で私どもの取り組みに迫るご指摘をいただけたのではないかと思います。

同時にもう一つ、先程濱田先生と鈴木先生との間で若干問題となっていました、このプロジェクトが東アジアというものをどの様に考えていくかという問題です。鈴木先生が冒頭で非常に大きな問題点を指摘してくださいました。東アジア圏の問題は何人かの方が西嶋先生の指摘とは違うところから、東アジアの枠組みをどのように設定すべきかを考えてきましたが、今回、鈴木先生によってかなり具体的な論点の提示をいただけたと思っております。これも、ご指摘を含めて果たして考えていく余地があるのかということも含め、先程名前の出ました石見先生の提示された論点も含めて今後議論を深めていく必要性を強く感じました。

会場から田中史生先生からご指摘いただいた点について。私は区別して考えるべきものと思います。それぞれの国の民、新羅の民、日本の民、そして中国の民の交流史が存在するという研究段階に今来ています。ただし、ここでそれを論じている訳ではございません。

しかし一方で国と国との公権力の問題を抜きに考えなければまずいのではないのかという田中さんのご指摘は非常に重要だと思います。具体的な1例にとどめますが、今日何人かの先生によって具体例が出されました、中国での、争長事件。つまり、中国に行って席次を争う、あの席次争いは中国の決めたある価値基準の中での争いです。中国側から見た一つの席次は秩序になります。その秩序は席を蹴って臨まないという一部分もあると同時に、例えば日本の大伴古麻呂は日本が2番、つまり西の第一位に位置づけられた時、東の第一に置けと主張する。これはどのレベルでの争いかといいますと、中国の決めた秩序、その秩序を認めた上で、なおかつ2番を1番にしろという主張です。まさに賓礼、賓礼の共有、これは別の言い方をしますと、私は『年報』1号で若干触れたのですが、国際的なプロトコルということです。つまり共通の、広く捉えれば色々な要素を含みますが、この争いは外交儀礼では言い尽くせない部分、すなわちプロトコルというものを拒否する場面です。しかしその一方で、それを求めていくという方法でしか、実は国が国としての存在を示し得ないという部分があります。

こういう部分の中に実は東アジア世界も生きている。私はやはりアジアの中で、東アジアというエリアの設定の中で、それぞれの国がそれぞれの主権を持って争う、また平和裡での交易もする、そういった中で位置づけられているこのプロトコルというものが覆い尽くす範囲、これがアジアあるいは東アジアです。その中で、やはり中国を範とする率が非常に高かった。したがってプロトコルの共有というものは、一面では従属の証と見られる部分もありますが、しかし従属の一面を持ちつつも、プロトコルというものを共有する中で、2番から1番に位置づけられるという、こういった言わば争いをしているといった面も見ておく必要があるのではないかと思います。私は感じました。

ということで、大変長い間、1時間余の討論、そして今日は朝10時からのスタートで聴いておられる皆様方、さぞかしお疲れだと思います。明日もあります。明日も、2日続きでお見えの方は、心地よいかは別として、頭に相当な事実がぼんぼん入っていくと思います。是非、こういった快い秋の、秋と言ってもこんな時期になってしまいましたけども。明日もございますので、是非この延長で、明日もまた白熱する議論、またご報告をいただけたらと思います。是非、明日ご都合のつく方、ご予約している方はおいでいただければと思います。本日はどうもありがとうございます。